

地 理 歴 史

世界史 A、世界史 B

第 1 高等学校教科担当教員の意見・評価

世 界 史 A

1 前 文

平成29年度の大学入試センター試験における「世界史A」の受験者数は1,329名で、昨年度より120名少なく、ここ数年で最少の受験者数であった。科目選択率も昨年度を下回る0.3%であった。今年度の平均点は42.83点で、ここ数年で最も低かった昨年度の42.07点と比べ0.76点上昇した。「世界史B」との平均点の差は22.61点で、昨年度の25.18点より2.57点縮小した。問題について細部にわたる検討は、従来どおり、以下の観点を基に実施した。

- (1) 高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）に準拠し、「世界史A」の目標を反映した問題であるか。
- (2) 「世界史A」の教科書内容に即した問題であるか。
- (3) 「世界史A」における基本的事項の理解と歴史的思考力を評価する適切な問題であるか。
- (4) 地域・分野・時代のバランス及び難易度・形式・表現などが適切であるか。

2 内容・範囲

(1) 試験問題の構成・内容

大 問	設問数	配 点	内 容
第1問	世界史上の植民地の形成や拡大及びその支配のあり方 (27点)		
	A 3問	9点	イギリス帝国の叙勲制度
	B 3問	9点	オランダの東南アジア支配
第2問	世界と日本の結び付き (31点)		
	A 3問	9点	朝鮮王朝による日本の情勢把握
	B 4問	12点	江戸時代の日本と諸外国との交流
第3問	ヨーロッパのキリスト教世界 (21点)		
	A 3問	9点	キリスト教と政治・社会との関係
	B 4問	12点	ヨーロッパ世界におけるイスラームの印象
第4問	第二次世界大戦以降の国際関係の展開 (21点)		
	A 3問	9点	ヨーロッパの地域統合
	B 4問	12点	第二次世界大戦後のアメリカ合衆国の国際関係

第1問のAでは、問1で世界史上の帝国、問2でインドの歴史、問3でオーストラリア連邦の成立時期について問うた。Bでは、問4でオランダの植民地政策とその影響、問5で東南アジアの歴史、問6で植民地数の増減について問うた。Cでは、問7でイエズス会の布教活動、問8でアメリカ大陸の先住民、問9で南北アメリカに存在した植民地の歴史について問うた。

第2問のAでは、問1で朝鮮半島の歴史、問2で明の最大領域、問3で日本と朝鮮半島との関係

について問うた。Bでは、問4で地動説の提唱者、問5で海底電信ケーブルの敷設時期、問6で18世紀のヨーロッパの政治状況、問7で浮世絵の影響を受けた印象派の画家について問うた。Cでは、問8でモンゴル帝国の歴史、問9で仏教、問10で中国東北地方への日本の侵略とその影響について問うた。

第3問のAでは、問1でキリスト教と政治との関係、問2で国家と労働者との関係、問3で世界史上の身分や社会階層について問うた。Bでは、問4で民族や信仰の違いに基づいて実施された政策、問5でデューラーが生まれた15世紀に起こった出来事、問6でトルコの歴史、問7でオスマン帝国の勢力が後退したことを示す17世紀末の出来事について問うた。

第4問のAでは、問1で戦間期に国際社会で起こった出来事、問2でチャーチルの事績、問3でヨーロッパ連合につながる統合の流れについて問うた。Bでは、問4でキューバ革命とキューバ危機、問5で第二次世界大戦後の紛争や国際関係、問6でベトナムの歴史、問7で国家間の対立や国家の統合・再編について問うた。

(2) 地域別の出題数・出題率

年度・出題数 地域	平成29年度 出題数 (出題率)	平成28年度 出題数 (出題率)	平成27年度 出題数 (出題率)
① ヨーロッパ・北アメリカ	16 (48.5%)	10 (30.3%)	14 (42.4%)
② 東 ア ジ ア	6 (18.2%)	4 (12.1%)	7 (21.2%)
③ 南アジア・東南アジア	4 (12.1%)	3 (9.1%)	1 (3.0%)
④ 西アジア・北アフリカ	3 (9.1%)	3 (9.1%)	5 (15.2%)
⑤ アフリカ・オセアニア・ラテンアメリカ	2 (6.1%)	8 (24.2%)	2 (6.1%)
複数地域混在	2 (6.1%)	5 (15.2%)	4 (12.1%)
合計	33 (100.0%)	33 (100.0%)	33 (100.0%)

【複数地域混在の問題】 - 全地域 - ①③

(3) 分野別の出題数・出題率

年度・出題数 分野	平成29年度 出題数 (出題率)	平成28年度 出題数 (出題率)	平成27年度 出題数 (出題率)
① 政治史	22 (66.7%)	21 (63.6%)	22 (66.7%)
② 社会経済史	6 (18.2%)	8 (24.2%)	4 (12.1%)
③ 文化史	3 (9.1%)	2 (6.1%)	5 (15.2%)
複数分野混在	2 (6.1%)	2 (6.1%)	2 (6.1%)
合計	33 (100.0%)	33 (100.0%)	33 (100.0%)

【複数分野混在の問題】 - ①③ - ①②

(4) 時代別の出題数・出題率

年度・出題数 時代	平成29年度 出題数 (出題率)	平成28年度 出題数 (出題率)	平成27年度 出題数 (出題率)
① 古代	1 (3.0%)	1 (3.0%)	1 (3.0%)
② 中世	5 (15.2%)	3 (9.1%)	4 (12.1%)
③ 近世	6 (18.2%)	5 (15.2%)	3 (9.1%)
④ 近代	11 (33.3%)	11 (33.3%)	8 (24.2%)
⑤ 現代	8 (24.2%)	12 (36.4%)	12 (36.4%)
複数時代混在	2 (6.1%)	1 (3.0%)	5 (15.2%)
合計	33 (100.0%)	33 (100.0%)	33 (100.0%)

【複数時代混在の問題】 - ③④ - ①③

3 分量・程度

本年度の出題数はこれまで同様33問で、大問の構成も昨年度からの4問が引き継がれた。リード文を全て精読して解答することを想定すると、妥当な出題数である。リード文には、歴史学の成果を基に受験者の世界史への関心を刺激するとともに、歴史を多面的に考察する視点を提供するものが多く、リード文と出題との関連も強く意識されたものであった。科目の性格上、近・現代史を中心に出题されており、例年に比べると前近代史からの出題が多かったが、出題内容はいずれも学習指導要領や教科書に沿った基礎的・基本的なものであり、受験者には取り組みやすく平均点も僅かながら上昇したと考えられる。

以下に学習指導要領・教科書・授業での扱い方の観点から「適切な問題」と「配慮・工夫を要する問題」への分類を試みる。

【適切な問題】

第1問の問4〔4〕は、オランダがジャワ島に対して行った植民地政策とその影響を問うものであった。植民地政策が現代における諸問題を引き起こしていることが理解できているか問うものであり、歴史を学習する意義にもつながる内容である点で評価できる。問6〔6〕は、植民地数の増減を示すグラフから読み取れる内容の正誤を判断させる問題である。16世紀から18世紀までを近世という一つのまとまりのある時代として捉え、この時期に世界が一体化に向かう過程を理解させる「世界史A」の大項目を意識した良問である。大航海時代を経てヨーロッパ諸国が世界各地に進出を始めた16世紀という時期と、ヨーロッパ諸国が植民地を巡って対立した七年戦争の時期を正確に理解できていれば、グラフを読み取って判断できる問題である。ただ、植民地の広さは、数ではなく面積で表すことの方が一般的ではないかと思われる。

第2問の問7〔16〕は、日本の浮世絵の影響を強く受けた印象派（後期印象派）の画家を問うものであり、文化面でも世界と日本との結び付きがあることを示すことで歴史の幅が広がるだけでなく、日本が世界に影響を与えた事例を取り上げることで、日本が世界の一員であり、日本も世界を動かす原動力の一つであることを感じさせるものであった。

第4問の問3〔29〕は、ヨーロッパ連合につながる統合の流れに関する並び替えの問題であるが、現代世界の動きを意識した「世界史A」の趣旨に沿った出題であった。

【配慮・工夫を要する問題】

第1問の問3〔3〕はオーストラリア連邦の成立時期を、第2問の問5〔14〕は世界初の海底電線ケーブルの敷設時期を、いずれも年表を使用して問うものであった。どちらも「世界史A」では細かい知識であり、その知識の記憶を単純に問うものであったため、正答率も低かったものと推測される。年表を使用する問題では、年号を記憶していなくても、事項の内容や経緯を理解していれば、思考を巡らせて判断できる出題が望まれる。問8〔8〕は、アメリカ大陸の先住民について問うものであった。世界史の問題としては、ムラートという用語の意味を問うものでなく、独立運動と絡めるなど歴史的な内容を含んだ出題であることが望まれる。

第3問の問2〔21〕は、国家と労働者との関係について問うものであった。正解となる国立作業場の設立は、「世界史A」では細かい内容であり記載のない教科書もある。高等学校における「世界史A」の学習指導では、基本的な事項・事柄を精選して指導内容を構成しており、正解となる選択肢は、その基準となる教科書全てに記載されている内容であって欲しい。

4 表現・形式

年度・出題数 設問形式	平成29年度 出題数（出題率）	平成28年度 出題数（出題率）	平成27年度 出題数（出題率）
正しい（適切な・該当する）ものを選択	31（93.9%）	31（93.9%）	29（87.9%）
誤った（関係ない）ものを選択	2（6.1%）	2（6.1%）	4（12.1%）
文章選択	17（51.5%）	20（60.6%）	14（42.4%）
事項（語句）選択	1（3.0%）	0（0.0%）	4（12.1%）
複数の事項（語句）の組合せ、並べかえの選択	10（30.3%）	8（24.2%）	10（30.3%）
地図・写真・絵画・グラフなどを使用した設問	5（15.2%）	5（15.2%）	5（15.2%）
合計	33（100.0%）	33（100.0%）	33（100.0%）

5 要 約

本年度も学習指導要領の趣旨に沿い、おおむね教科書の内容を踏まえた出題であった。第1問「世界史上の植民地の形成や拡大及びその支配のあり方」、第2問「世界と日本の結び付き」、第3問「ヨーロッパのキリスト教世界」、第4問「第二次世界大戦以降の国際関係の展開」と、大問が四つの構成であり、昨年度同様、多様な観点からの出題がなされたことは評価できる。

平均点は昨年度よりやや上昇し、全体として平易な内容の出題であった。大問や小問のリード文がよく工夫され、興味深く読ませる内容となっていた。特に、過去には設問や小問でしか取り上げられなかった「世界と日本の結び付き」というテーマが、第2問全体にわたって扱われたことは、学習指導要領における科目の目標をより意識したものとして評価できる。しかし、第3問のBで示されたメフメト2世の肖像画はリード文と関わりがないなど、掲載の意図の分からない図版もあった。扱われる図版には興味深いものが多いため、設問と関連させることで受験者に新たな気付きを促すことができると考える。全体としてはリード文と出題との関連性がより改善されており、引き続き工夫をお願いしたい。各設問においても、文章の正誤判定だけでなく、グラフを読み取らせたり、事項の起こった時期を並び替えさせたりするなど、思考力や判断力が必要な良問もいくつか見受けられた。

出題のバランスについて見ると、地域別では、「ヨーロッパ・北アメリカ」がやや多く、受験者にとっては取り組みやすかったのではないかと推測される。「東アジア」及び「西アジア・北アフリカ」や「アフリカ・オセアニア・ラテンアメリカ」からの出題も一定数あり、バランス良く出題されていた。分野別では、「政治史」の出題が多くなるのは教科書の記載のバランスからやむを得ないが、多様な観点に配慮した出題をお願いしたい。時代別の出題では、近・現代史からの出題が33問中19問で、昨年度より「現代史」が減少し「中世史」・「近世史」がやや増加した。「世界史A」の目標を鑑みると、特に「現代史」からの出題は一定数必要であると考えられる。

「世界史A」は、グローバル社会に生きていく国民の必須教養として、各地域の歴史的知識を身につけ歴史的思考力を培うことを目標とする科目であるから、出題する地域、時代、分野のバランスについて配慮をお願いしたい。あまりにも詳細な事項についての出題は、科目の性質上ふさわしくなく、公平の観点から、使用している教科書によって難易度に差が出ることはないよう、特に正答となる選択肢については、全社の教科書に記載があるものにしてほしい。また、広い歴史的視野を培うため、リード文と関連の深い一つのテーマに沿って、複数の地域、分野、時代にわたる出題や、特に歴史的思考力を引き出すためのグラフ・表・地図を活用した出題の工夫を引き続きお願いしたい。

世界史 B

1 前 文

本年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という）の受験者のうち、教科「地理歴史」の受験者は本試験・追試験を含めて394,456名であり、昨年度と比べて12,376名増加した。「世界史B」の受験者数も87,612名と、昨年度の84,144名から3,468名増加し、科目選択率で0.2ポイント増の21.3%となっているが、一昨年度の選択率よりも低く、世界史離れの状況が改善しているとは言いがたい。

今年度の平均点は65.44点で、昨年度の67.25点と比較するとやや低下したが、他科目との比較もあわせて考えると、おおむね妥当な難易度であったと思われる。

以下、問題についての細部にわたる検討は、本年度も従来と同様に次の観点で行っている。

- (1) 高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という）に準拠し、「世界史B」の学習目標に適合しているか。
- (2) 教科書の内容に即し、それを逸脱しない出題であるか。
- (3) 世界史の基本的事項の理解と歴史的思考力を評価する適切な問題であるか。
- (4) 問題数・配点や出題の地域別・分野別・時代別のバランスは適切か。
- (5) 問題の難易度・形式・表現などが適切であるか。

2 内 容・範 囲

(1) 試験問題の構成・内容

大 問	設問数	配 点	内 容
第1問 世界史上のマイノリティ（少数派）（25点）	A 3問	9点	コプト教徒の歴史
	B 3問	8点	インドにおけるヒンドゥー教徒とムスリム
	C 3問	8点	ロシアにおける民族マイノリティ
	第2問 世界史上の革命や政治体制の変化（25点）		
A 3問	8点	フランスの1791年憲法	
	B 3問	8点	革命と歴史研究
	C 3問	9点	アジアにおける民主化の過程
第3問 国家が諸地域を統合するために採用した制度（25点）	A 3問	9点	アッパース朝における中央集権体制の確立
	B 3問	8点	中国における南北間の経済的統合
	C 3問	8点	ヨーロッパにおける国家体制の変遷と軍隊
	第4問 自然環境・資源と人間の関わり（25点）		
A 3問	9点	アメリカ大陸の銀とスペインの繁栄	
	B 3問	8点	アジアにおける海洋交易
	C 3問	8点	ヨーロッパにおける森林資源の利用

(2) 地域別の出題数・出題率

地域	年度・出題数	平成29年度 出題数 (出題率)	平成28年度 出題数 (出題率)	平成27年度 出題数 (出題率)
西 欧 ・ 北 米		8 (22.2%)	11 (30.6%)	13 (36.1%)
東 欧 ・ ロ シ ア		4 (11.1%)	3 (8.3%)	1 (2.8%)
東 ・ 内 陸 ア ジ ア		5 (13.9%)	9 (25.0%)	7 (19.4%)
南 ・ 東 南 ア ジ ア		4 (11.1%)	3 (8.3%)	3 (8.3%)
西 ア ジ ア ・ ア フ リ カ		6 (16.7%)	3 (8.3%)	4 (11.1%)
中 南 米 ・ オ セ ア ニ ア		3 (8.3%)	3 (8.3%)	2 (5.6%)
複 数 地 域 混 合		6 (16.7%)	4 (11.1%)	6 (16.7%)
合 計		36 (100.0%)	36 (100.0%)	36 (100.0%)

(3) 分野別の出題数・出題率

分野	年度・出題数	平成29年度 出題数 (出題率)	平成28年度 出題数 (出題率)	平成27年度 出題数 (出題率)
政 治 史		24 (66.7%)	21 (58.3%)	22 (61.1%)
社 会 経 済 史		8 (22.2%)	4 (11.1%)	7 (19.4%)
文 化 史		2 (5.6%)	8 (22.2%)	7 (19.4%)
複 数 分 野 混 合		2 (5.6%)	3 (8.3%)	0 (0.0%)
合 計		36 (100.0%)	36 (100.0%)	36 (100.0%)

(4) 時代別の出題数・出題率

時代	年度・出題数	平成29年度 出題数 (出題率)	平成28年度 出題数 (出題率)	平成27年度 出題数 (出題率)
古 代 史		5 (13.9%)	5 (13.9%)	3 (8.3%)
中 世 史		8 (22.2%)	6 (16.7%)	4 (11.1%)
近 世 史		3 (8.3%)	5 (13.9%)	4 (11.1%)
近 代 史		4 (11.1%)	6 (16.7%)	9 (25.0%)
現 代 史		11 (30.6%)	9 (25.0%)	9 (25.0%)
[うち戦後史]		3 (8.3%)	3 (8.3%)	3 (8.3%)
複 数 時 代 混 合		5 (13.9%)	5 (13.9%)	7 (19.4%)
合 計		36 (100.0%)	36 (100.0%)	36 (100.0%)

中世 (5c~14c)・近世 (15c~17c)・近代 (18c~19c)・現代 (20c) を目安とする。

(5) 出題形式別の出題数・出題率

設問形式	年度・出題数	平成29年度 出題数 (出題率)	平成28年度 出題数 (出題率)	平成27年度 出題数 (出題率)
正しい (適切な・該当する) ものを選択		34 (94.4%)	32 (88.9%)	30 (83.3%)
誤った (関係ない) ものを選択		2 (5.6%)	4 (11.1%)	6 (16.7%)
文章選択		20 (55.6%)	21 (58.3%)	19 (52.8%)
事項 (語句) 選択		2 (5.6%)	2 (5.6%)	2 (5.6%)
複数の事項 (語句) の組合せから選択		14 (38.9%)	13 (36.1%)	15 (41.7%)
地図・写真・絵画・グラフ・年表など使用		7 (19.4%)	6 (16.7%)	4 (11.1%)
合 計		36 (100.0%)	36 (100.0%)	36 (100.0%)

6 択問題は、今年度は 1 問のみであった。

3 試験問題の分量・程度

本年度の試験問題では、地域別で「西アジア・アフリカ」からの出題が増加した。また、分野別では「文化史」が減少し、時代別では「中世史」「現代史」が増加した。基本的事項を内容とする出題が多く、試験時間と分量（設問数36問）については適切であった。

以下、試験問題の分量・程度について「世界史B」の教科書・学習内容などの視点を含めながら大問ごとの検討を行った。

第1問 世界史上のマイノリティについて

主に政治史に関する設問がなされ、全体的な難易度としては標準である。

問1 世界史上のキリスト教の異端について、正しい文を選択する問題。②は公会議についての正確な知識がなければ判断は難しい。

問2 アフリカの歴史について、正しい文を選択する問題。地理的理解を含む正確な知識を必要とするので、やや難しい。

問3 中世ヨーロッパ各国の政治動向について、正しい文を選択する問題。④が正解であることは容易に判断できる。

問4 全インド＝ムスリム連盟が結成された時期について、年表から選択する問題。インド独立運動の大きな流れを正しく理解しているかを問う良問である。

問5 ムスリムの君主や王朝について、正しい文を選択する問題。基本的事項である。

問6 インドの海上交易についての二事項判別問題。南インドの諸王朝について正しく理解していなければ判断は難しい。

問7 ロシアやソ連の対外関係について、正しい文を選択する問題。①②④が誤りであることは容易に判断できる。

問8 英・独・露3か国の銑鉄生産量の推移について、グラフから読み取る二事項判別問題。難易度は標準である。

問9 チェチェン紛争が勃発した時期について、年表から選択する問題。難易度は標準であるが、冷戦後の世界情勢についての正確な理解を必要とするため、やや難しい。

第2問 世界史上の革命や政治体制の変化について

政治史に関する設問が多く、全体的な難易度としては標準である。

問1 世界史上の憲法について、誤っている文を選択する問題。④が誤りであることは容易に判断できる。

問2 世界史上の議会について、正しい文を選択する問題。基本的事項である。

問3 世界史上の共和政や共和国についての二事項判別問題。基本的事項である。

問4 古代ローマの政治体制について、正しい文を選択する問題。基本的事項である。

問5 中世ヨーロッパにおいて東方貿易に従事した都市の名とその位置について、正しい組合せを選択する問題。基本的事項である。

問6 ロシア革命について、誤っている文を選択する問題。基本的事項である。

問7 メキシコ革命について、正しい語句の組合せを選択する問題。基本的事項である。

問8 国民政府が統一した後の中国政治について、正しい文を選択する問題。中国現代史について正しく理解していなければ判断は難しい。

問9 民主化政策や民主化運動について、正しい文を選択する問題。戦後史について正しく理解していなければ判断は難しい。

第3問 国家が諸地域を統合するために採用した制度について

政治史に関する設問が多く、全体的な難易度としては標準である。

問1 土地の管理や租税徴収について、正しい文を選択する問題。基本的事項である。

問2 思想・言論・宗教に対する国家の介入について、正しい文を選択する問題。基本的事項である。

問3 「未知なる世界」への探検について、空欄に当てはまる語句の正しい組合せを選択する問題。基本的事項である。

問4 隋の治水事業について、その内容と位置の正しい組合せを選択する問題。基本的事項である。

問5 諸国家や諸勢力の間で起こった交流や対立について、正しい文を選択する問題。基本的事項である。

問6 唐代中後期に起こった出来事について、正しい文を選択する問題。②が正解であることは容易に判断できる。

問7 貨幣や貨幣制度について、正しい文を選択する問題。戦間期における各国の経済政策についての正しい理解が求められる。

問8 傭兵や兵士について、正しい文を選択する問題。基本的事項である。

問9 国家の統治制度や軍事制度についての二事項判別問題。基本的事項である。

第4問 自然環境・資源と人間との関わりについて

政治史、社会経済史、文化史がバランス良く配分されている。全体的な難易度としてはやや易しい。

問1 インカ帝国の位置とその征服者について、正しい組合せを選択する問題。基本的事項である。

問2 アメリカ大陸の銀とその流通についての二事項判別問題。基本的事項である。

問3 世界史上の海戦について、正しい文を選択する問題。基本的事項である。

問4 自然哲学や薬学についての二事項判別問題。基本的事項である。

問5 港市国家の名とその位置について、正しい組合せを選択する問題。基本的事項である。

問6 世界史上の船に関する出来事について、最も適当なものを選択する問題。②が正しいことは容易に判断できる。

問7 河川や水路の整備・開発について述べた文を年代順に並べる問題。世界史の大局的な流れを考察させる良問である。

問8 木材や鉄に関わる歴史について、正しい文を選択する問題。①③④が誤りであることは容易に判断できる。

問9 植物学に関わる人物について、正しい組合せを選択する問題。近代文化史についての正確な理解を必要とする。

4 試験問題の表現・形式

「世界史B」は、例年通り大問4問で構成されていた。リード文の内容は、マイノリティ、革命・政治体制の変化、国家による地域統合、環境・資源と多岐にわたり、いずれも現在の世界情勢と関連する示唆に富んだものであった。

設問形式としては、地図や年表などの資料を使用した問題が増加している。とりわけ、地図を用いて地理的理解を問う問題が増えているが、地理歴史科の科目間の関連を重視する「学習指導要領」の趣旨に沿ったものと言えよう。文章選択問題の割合もこれまでと同様に高い。単に知識を問うだけではなく、歴史事象を世界史の大局的な流れに位置付け、相互に関連付けて考察させる工夫

がなされている。

しかし、問題に掲載されている興味深い数々の資料やリード文が、十分に活用されているとは言いがたい。第1問の間8はグラフの読み取り問題であったが、第一次世界大戦や第2次五か年計画の時期のみを問うもので、資料の分析力が試される性格のものではなかった。写真資料や絵画資料については、解答に当たってほとんど参照する必要がない扱いにとどめられた。高等学校教育現場では資料を活用しながら思考力・判断力を培う教育が一層重視される傾向にある。基本的な知識を前提とした上で、リード文や資料自体を活用させる一層の工夫があっても良かったのではないだろうか。

5 要 約 (総合的な評価)

本年度の「世界史B」は出題率で見ると、地域別では「西アジア・アフリカ」が増加している。依然として「西欧・北米」がほかの地域に比べて高いものの、その割合は例年に比べて低くなり、よりバランスの取れた内容になっている。時代別では「中世史」からの出題が増えているものの、例年同様、全体として「現代史」の割合が高かった。

本年度の地理歴史の「B」科目における平均点は、「世界史B」が65.44点、日本史Bが59.29点、地理Bが62.34点であり、選択した科目間でばらつきが出ないように配慮されていた。内容は全て「学習指導要領」の趣旨に沿った基本的事項を中心にしたものであり、教科書の内容を理解していれば十分に対応可能であった。出題範囲のバランスや平均点を配慮しながら、単に知識について問うだけでなく、歴史事象を世界史の大局的な流れの中で考察させる問題を作成された先生方の御尽力には感謝したい。

最後にセンター試験は、高等学校の授業に大きな影響を与え、指針となっている。様々な資料を活用することで、受験生の知的好奇心を刺激し、彼らの思考力、判断力を問う問題が今後も増えていくことを期待したい。